

パリ1750—子供集団誘拐事件の謎

A・ファルジュ、J・ルウェル著

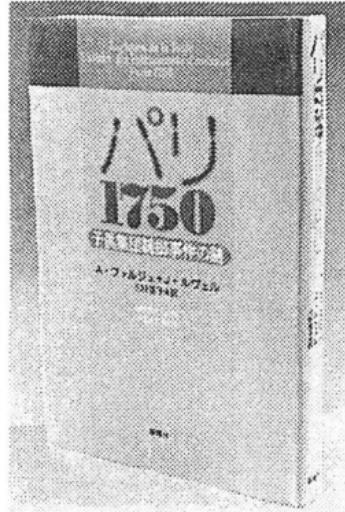
今まで路上で遊んでいた子どもが突然いなくなる。どんな親にとっても、それはあってはならない出来事であるはずだ。だが、その出来事は、自分たちのささやかな幸せをおびやかす悪夢として、常に私たちの日常生活の中に潜んでいる。

本書の著者たちは、「子ども」は多くの意味を含んだ集合的防衛のシンボルである、と述べている。だから、子どもが犯罪や暴力におびやかされる社会は、不安を根底に抱え込んだ病んだ社会なのである。そういえば、最近読んだジョン・サンンドフォードのダヴァンポート・シリーズの新作『冬の獲物』（早川書房）も子どもへの性的虐待をテーマとして設定していた。私立探偵バーク・シリーズを含めてアメリカ・ミステリーのこのテーマへのこだわりをみるにつけ、私はアメリカ社会の「不安」を痛切に感じるのだ。

ともあれ、本書のテーマは、一七五〇年、ルイ十五世治下のフランスの首都パリで生じた子どもたちの拉致事件である。なぜ路上から子どもたちが官憲らしき人物たちに連れ去られたのか、その状況を知った民衆がどのような行動を示したのか、警察や密偵たちの反応はいかなるものだったのか、あたかも一編の推理小説を読むかのような筆致で叙述が進む。もちろん、歴史書とはいえ、極上のミステリーとも言えるこの本の結末を明かすのは反則なので、ここではふれない。著者は、都市の中に張りめぐらされた権力のネットワークと都市民衆の社会的結合との緊張関係がいかに発生し、どのように終結したかを資料の解説を通じてみごとに再現してみせてている。

十七世紀末以来、パリには浮浪者が流入し、治安の悪化を心配する声が増えていた。物乞（ご）いは、一七〇二年に九千人、一七五〇年には一万五千人と膨張していた。官憲による浮浪者への無差別な逮捕が始まり、人々の反感をかつていた。さらに一七四九年十二月から翌年の五月まで、非行少年狩りが行われ、数百の子どもたちが「誘拐」された。そのなかにまったく無関係の子どもたちも含まれていた。こうして都市は、暴動の発火点へと近づいてゆく。そしてこの民衆暴動から数えて三十九年後、民衆はバステイユ監獄へと殺到することになるだろう。（東京経済大教授）

ミステリー風歴史書 反乱生んだ少年狩り



（三好信子訳、新曜社
・167ジ・1,854円）

A. Farge 国立科学研究所研究ディレクター。J. Revel パリの社会科学高等研究院院長。

評者・桜井 哲夫